

昭和三十九年の茅葺屋根の葺き替え 一 前準備編

志村 良知

生家は茅葺だった。地元では茅葺屋根の葺き替えを屋根替と言った。最後の屋根替は私が中学卒業の昭和三十九年三月だった。時代はビートルズの日本デビュー、間もなく東京オリオンピックという頃で、当時さすがに近辺に茅葺の家は無く、職人の高齢化や大量の良質な茅調達の問題で、近隣最後の大規模屋根替になるだろうというイベントだった。

茅葺屋根を葺くやり方は家の構造や流儀があつて土地それぞれのもと思う。以下は山梨県北部の農家の屋根替風景である。当時私は高校合格直後の暇な身で、この屋根替には職人の下働きとして朝から晩まで参加し、飲む時には車座に加わり、ビール一杯もお相伴をして職人の話を聞いた。そして今や、私はあの地方の屋根替経験者の貴重な生き残りと言つて間違いなく、思い出せる限りここに記録しておきたい。

屋根替をする母屋は間口七間、奥行き五間、複数の梁を一本の大黒柱で支える構造。屋根は、雨水の滞留防止で勾配はきついが単純な表裏二枚の切妻造りである。屋根の中央に囲炉裏の煙を出すための「煙出 \parallel けぶだし」と呼ぶ小屋が設けてある。この地方の大型の農家に見られる特徴で煙出を載せた屋根は風格がある。

屋根替の準備は前々年の春、茅（ススキ）の入会地の結の親方に仁義を通して、翌年の春先に刈り取る範囲を決め、品質の良い茅が取れるよう管理を依頼するところから始まる。入会地は家の東側に見える茅が岳の南西斜面にあつた。

屋根の主材である茅のクッション材として使う麦藁は丈の長い小麦を屋根に使うことを意識して扱い、脱穀後の麦藁は屋根裏に保管しておく。屋根の骨組みとなる真竹は、伐採の旬の秋に切り出し、枝を払って雨に濡れず、風通しよく養生して寝かせておく。

寒い土地なので屋根替は春になってからの作業だった。屋根替の段取りが決まると、庭に大量の茅が運び込まれ、麦藁と共に千歯こきのような道具で葉っぱなどを取り払いきれいな茎のみとする作業が始まる。

作業編に続く